

立命館大学大学院文学研究科

修士論文要旨

項目情報と順序情報の記憶における
語長の影響・順序情報の独立性

心理学専攻 都賀 美有紀

本研究では、語長による影響を通して項目情報と順序情報の関係性に言及すること、順序情報とは何かに関して示唆を得ることを目的とした。

本研究の実験1と実験2では項目情報と順序情報が独立しているのか、依存関係にあるのかを語長による影響を通して検討した。記憶する項目の語長が短い単語が長い単語よりも記憶成績が高いことは、語長効果として知られている現象である (Baddeley, Thomson, & Buchanan, 1975)。*すなわちこれは*Baddeley (1986)によると、短い単語は長い単語よりも同じ時間でよりリハーサルできるため、記憶が高まると説明されている。本研究の実験1と実験2ではこの語長の違いが項目情報と順序情報にどのように影響するのかによって、これらの関係性を考察した。実験1と実験2では、項目情報の記憶を測定するとして自由再生課題を用い、順序の記憶を測定するとして再構成課題を用いた。実験1ではこれらの課題を別々に行い、実験2ではこれらの課題を混合してランダムに行った。もし項目情報と順序情報が依存関係にあるのであれば、自由再生課題と再構成課題において語長の影響は同様のパフォーマンスとして生じると考えられる。しかしながら、実験1と実験2の結果は、自由再生課題には語長の違

いによる影響が生じたが、再構成課題には影響が見られなかった。このことは、項目情報と順序情報が独立性を持つて支持している。

実験1と実験2において使用した再構成課題は主に順序の記憶を測定していると考えられる。しかしながら、項目という存在なしには順序は記憶することができないことから、この再構成課題の結果にも項目の記憶が干渉している可能性が考えられる。このことから、実験1と実験2において再構成課題では語長の影響が見られないというパフォーマンスが示されたが、その結果がそのまま順序情報への語長の影響であるかどうかは明らかではなかった。再構成課題に項目の記憶が干渉を与えているのであれば、順序情報の記憶に対して語長はネガティブな効果を持つことが考えられる。つまり、再構成課題のパフォーマンスは、ポジティブな語長効果を持つ項目の記憶と、ネガティブな語長効果を持つ順序の記憶が、その影響を相殺した結果である可能性も考えられる。そこで実験3では、順序情報に語長が影響を与えているかどうかを、純粋な項目情報と順序情報の記憶の推定値を算出するとして提案されている Zairine & Kelley (2004)のパラダイムを用いて検討した。このパラダイムは過程分離手続き (Jacoby, 1991)を基に考案されているものである。その結果、項目情報を覚えていた確率は短い語長が長い語長よりも高く、順序情報を覚えていた確率には、各語長に違いはなかった。項目情報への語長の影響はBaddeley (1986)の語長効果と同様のパターンで生じており、リハーサルによって説明できる。一方、順序情報の記憶に語長の影響が見られなかったことは、このリハーサルの効果が順序情報には及んでいなかったと考えられる。このことから、順序情報がリハーサルにセンシティブではない性質を持つていた可能性が考えられる。

ニオイの記憶に及ぼすニオイ物質の 親近性とラベリングの影響

心理学専攻 千場 美紀

認知嗅覚研究は嗅覚処理における言語の関係、嗅覚の記憶の保持時間、経験やニオイの親近性の機能のような、さまざまな要因を扱っている。この論文は、ニオイの短期再認記憶を検討する。記憶研究では頻繁に再生課題を使用するが、ニオイを再生することは困難であるため、再認課題を使用することとした。再認課題は提示フェーズ、保持インターバルと再認フェーズで構成した。刺激(ニオイ物質)は二〇の日常的な食品と日用品、一〇の非日常的な精油であった。提示フェーズでは十五のニオイ物質を提示し、再認フェーズで三〇のニオイ物質を提示した。そのとき、実験協力者には「あったか」なかった「のいずれかで回答を求めた。本研究は一つの調査と二つの実験で構成され、ニオイ記憶にニオイ物質の親近性(経験の有無)と言語ラベリングが影響する要因であるかどうかを、ニオイ物質の異なるカテゴリ(食品、日用品、精油)と提示フェーズでの条件の違い(ニオイに命名する、アロマテラピスト、統制、強度評定、名称ラベルの対提示)で検討した。最初に、四十七種類のニオイ物質名称の経験の程度を質問紙で調査した。二つ目に、調査結果より実験で使用するニオイ物質を選定し、意図的学習による再認実験(実験1)をおこなった。最後に、偶発学習による再認実験(実験2)をおこなった。ニオイの再認記憶に学習の違いが影響するかどうかを検討した。実験1と2で使用するニオイ物質は同様である。実験1の結果は、ラベリングとニオイの経験ともに影響しないことを示した。これは、ニオイを提示することに命名を求められていない群も命名をしていた可能性が考えられる。意図的学習を用いたニオイ記憶は、記憶方略として命名を使用する

ことを示唆した。そこで実験2では、命名妨害として偶発学習によるニオイ記憶を検討することとした。結果は、親近性の高いカテゴリ(食品)のパフォーマンスとラベル生成をおこなった群のパフォーマンスが高かった。すなわち、ニオイ記憶にはニオイの親近性とニオイへのラベル生成が重要である。さらに、パフォーマンス(再認正答率)をヒット率とコレクトリジエクション率で分析したところ、異なるパフォーマンスを示した。学習の違いにかかわらず、ヒット反応とコレクトリジエクション反応は異なる処理であり、それは二重符合理化論で説明できると考えた。パフォーマンスはヒット率では食品、コレクトリジエクション率ではラベルの生成が高かったことから、ヒット反応は感覚(嗅覚)表象、コレクトリジエクション反応は言語表象によって符号化される可能性がある。また、ニオイの強度とパフォーマンスには正の相関がみられた、一方ニオイの快不快にはみられなかった。ニオイの再認記憶はおそらく、意味的処理に依存すると考えた。また、ニオイは感覚(嗅覚)的符合理化と言語的符合理化の両方で符合理化されると推察した。

「巴」の造型

日本文学専攻 Lazetta Claudia

巴は木曾の義仲という人物に強い絆で結ばれている登場人物だと言ってよい。『平家物語』諸本で登場する巴登場人物の描き方について細かい異同を認知できても、巴は何にもまして勇敢な女武者である。一方では、巴が登場する場面の異同に伴い、巴像もさまざまなニュアンスを獲得してけると言えるだろう。つまり、巴は戦場離脱の場面まで女武者として明確に認められつつ、戦場離脱という場面の微妙に違う描写により、巴像は女武者像を離れてしまう他の女性像を連想させる形で登場すると言ってよいのではないだろうか。特に、戦場離脱という場面の差異及び巴後談という段から、巴は「母」「妻」「後家尼」という女性像をもとにして造型されてくる。要するに、巴像は女武者像を次第に離れ、当時の社会に調査しうる先述の女性像を連想させて登場すると言えるかもしれない。この変化の原因は分ち難いが、おそらく中世後期に行われていた、社会における女性地位の変化に由来しているのではないだろうか。このように、巴像は女性の社会的な変化を反映して変わってくるのだろう。

ところが、巴は『平家物語』という軍記物語の範囲外にも認められ、『巴』という謡曲にはシテとして登場するのである。にもかかわらず、巴は謡曲にも独特の登場人物として現れるのである。まず、『巴』は女性登場人物をシテとする唯一の修羅物である。それに加えて、『巴』における場面の順序と内容は、典拠である『平家物語』の「木曾最期」とかなり違う。それだけでなく、修羅物に重要である救済方式も、『巴』では奇妙だと言えるのだろう。そして、謡曲における巴像にとどまらず、『巴』と『平家物語』の「木曾最期」に典拠する他の謡曲との関係や同異も検討する必要があるのではないだろうか。

第一章では、木曾義仲の昇進と暴落を手短に触れてから、『平家物語』諸本における巴像について―特に、巴の伝記と出身、巴の戦場離脱、巴の後談という三つの点―考察した。第二章では、巴像に反映している社会的な女性像を―特に、美女、女武者、後家尼―検討した。第三章では、木曾義仲伝説における顕著な登場人物をシテとする謡曲にふれつつ、謡曲に登場する巴像を考慮した。

かういふ女たち..

宮本（中條）百合子と平林たい子の生涯と作品

日本文学専攻 Nadezhda M. Murray

中條百合子は一八九九年に、平林たい子は一九〇五年に生まれた。二人とも早熟に育ち、読書をむさぼり、早いうちから執筆を試みる。二人とも二十歳前後で家を出て、間違った結婚をしては離婚する。二人とも、そのすべきでなかった結婚を元に優れた作品を引き出す。二人とも海外をさまよひ、筆を磨き、左翼活動に入っつてそこで出会う男性と再婚する。二人とも戦時中はその思想のために投獄されて瀕死し、それでも屈せずさらに作品に力を注ぐ。他界するとき（百合子は一九五一年に、たい子は一九七二年に）、二人ともその時代の最も重要な女性作家として知られるようになっていた。

百合子とたい子は、驚くほど平行に生きながらも、人生の内容も色彩もまったく異なっていた。修士論文で、私はその人生を「社会的テキスト」として読み解いて行く。二人のただならぬ体験と、その体験から生まれたそれはまたただならぬ作品を紹介しながら、その人生と作品からたい子と百合子の生き方、同時代の女性の仕事と私生活とのあり方、を考えて行く。

修士論文の第一部と第二部はそれぞれ百合子とたい子への誘い、または入門として設けてある。人生前半を簡単に説明しながら、二人とも思い出され、読まれ、訳され、考えられる必要をここで示す。その理由は二人それぞれなので、第一部と第二部との長さがずいぶん違っている。第一部では、百合子の最も大切でしかもまったく未英訳の著作（いわく『伸子』時代の日記、湯浅芳子宛書簡）をかなりの量で訳して紹介する。第二部では、たい子の若い頃の個人史を短篇小説からの引用を交えて説明しながら、公域歴史へのその反響性をさぐる。第

三部では、二人を一緒にし、人生後半の史実を加えながらそれぞれの再婚（百合子は宮本顕治と、たい子是小堀甚二と）を比較対照して、それで同時代の女性の人生において結婚、活動、執筆についてなんらかの結論を導き出してみる。日本語要約を添えたが、修士論文の本文を英語で提出することにした。百合子・たい子を英語で扱った論文、または作品の英訳、がまだ非常に少ない（特に、同時代の男性作家に比べては）。英語で二人のことを紹介し、英語圏の知名度をあげることが最終目的として修士論文の執筆にかかった。

正岡子規「墨汁一滴」「病牀六尺」論

新聞連載に託した緊張の緩和

日本文学専攻 大槻 千紘

正岡子規「墨汁一滴」「病牀六尺」は、それぞれ明治三十四年と三十五年に、新聞「日本」に連載された、子規晩年の随筆作品である。

従来、これらの随筆作品に対する見方は、非体系的なものとして、多彩な内容をそのまま子規の総体として受け止めるものがほとんどであり、連載に関する子規の意図や作品の構造については触れられてこなかった。

そこで本論では、両作品の新聞連載という面に着目することで、そこに随筆としての不確定な性格を含みながらも、なおかつ連載という志向を選んだ点での、子規の作品構成に関わる意図を読み取ろうと試みた。

第一章は「墨汁一滴」について、まず一、二節においては、連載記事にひそむ「笑い」の要素に注目、笑いの芸である「落語」のパターンを用いて客観的に分析し、子規の意図を考察した。続く三節では、内容的に比重が大きい歌の話題、及び子規の自作連作短歌の発表に焦点をあて、同じく子規の連載意図を探った。

第二章は「病牀六尺」について、一、二節では、個々の記事において、前作「墨汁一滴」に比べ笑いの要素が薄れたことを出発点に、代わって表出した記事の要素を「遊び」と捉え、その分析から、連載についての子規の真意を推しはかった。三節では、そうした「墨汁一滴」と「病牀六尺」とでの変化の理由を、その間に書き始められた非公表の日記「仰臥漫録」を手がかりに考察した。

「墨汁一滴」には、大きく二つの意図が存在する。一つは、子規にとつての

「二人笑いの瞬間」を日々の記事に込めること、もう一つは、自身の連作短歌を発表することである。病苦という制約の下にあつて、子規の発見したささやかな一人笑いの瞬間は、「落語」のサゲのパターンを用いて記事に移し込まれることで自立し、同病の者さえ面白がらせた。また、連作短歌の発表は、病苦の中、子規の歌に対する思いが、連載の中で凝縮した形であらわれたと捉えられる。

一方、「病牀六尺」では、子規の意識は日々のやり過ぎしに集中する。絶え間ない苦痛は、日々「遊び」で切り抜けられ、その結果が記事としてあらわれる。子規が遊びに熱中することで、結果的に記事の笑いは薄れる。何より子規にとつては書きたい事を書き散らし、新聞雑誌に載せることが最大の愉快な遊びであり、連載の意図であつたといえる。

「墨汁一滴」と「病牀六尺」は、その意図においては明確な違いがある。しかし、その根底にある、常に病苦による緊張を緩和する子規の意識において、共通した性質を持っている。

二作品の基調はそれぞれ、緊張が緩和された時に起きる落語的「笑い」や、緊張を解く努力である「遊び」によって貫かれていく。随筆の記事一つ一つに横溢する緊張の緩和は、現代にも通じる、緊張と共に生きる一つの普遍的形を提示する。新聞連載の観点から二随筆を読み直すことで、「墨汁一滴」「病牀六尺」に新たな評価を加えることが出来たと考える。

近代における日韓の相互認識に関する研究

— 金玉均と福沢諭吉を中心に —

史学専攻（日本史） 金 男 恩

本論文は、東アジアの伝統的国際秩序が近代的な国際秩序へと編入されていく、その「転換期」において、朝鮮の開国を境として新たに形成された日韓の相互認識を明らかにするものである。具体的な研究テーマは、「近代における日韓の相互認識に関する研究」である。当時の人々にとって、「伝統と近代とはどのような意味をもっていたのか」、また彼らは、「伝統から近代への転換という潮流にどのように対応しようとしたか」、これらの二つの問いが本論文の問題意識の発端である。

朝鮮における近代とは、日本とは異なり西洋列強のアジア侵略（ウェスタン・インパクト）に対する一國次元の問題のみならず、清国との宗属関係を解体し、新たな国際関係への改編を促すものであった。そのため朝鮮の近代国際秩序への移行は、朝鮮の近代への道を自国の問題ではなく朝鮮を取り巻く国際情勢と密接に絡むものとなった。具体的には、近代日韓関係が形成されるのみならず、朝・清関係の解体の動きが生じ、他方では、清国による朝貢関係と条約関係が同時に認められる二重外交体制が樹立せられた。このように日本と清国を含めた東アジア三国の関係において、朝鮮の近代への移行は西洋の国際秩序への受動的な編入の過程としてとらえられがちだが、国際秩序原理やその枠組みへと自らを能動的に組み入れようとしたという側面を見逃してはならない。朝鮮は、清国との宗属関係においては「属国」であっても、同時に「自主」の国として行動したため、開国を契機として西洋の国際秩序の原理を選択・受容しつつ、

華夷秩序を「近代的」に改編しようとした。そのような中で、朝鮮の政治改革と近代化を構想し得たのが金玉均ら開化派であった以上、彼らを研究の対象とするその意義は、いうまでもないだろう。

一九世紀中葉以来、西洋列強の動向と深く関わりながら近代日韓の相互認識が形成されることとなり、これは西洋化・近代化の達成度から評価されるものであって、それまでのあり方とは決定的に異なるものであった。朝鮮においては、とりわけ金玉均が西洋文明の導入による朝鮮の近代化を目指していたが、西洋文明によって「開化」することは清国の文明をなんらかの形で否定すること、すなわち清国との宗属関係の解体をも意味するものであった。一方、日本においては「文明」という概念をもつて自国の近代化を目指した福沢諭吉の試みこそが、一九世紀の近代日本への歩みを可能にした一つの淵源であったといえる。それゆえに本論文は、近代日韓の相互認識を明らかにするため、金玉均と福沢諭吉を対象としている。金玉均と福沢両者にとって「近代的国際秩序とはいかなるものであったか」、また彼らはこれらに対応して「いかなる新しい国際秩序を構築すべきだと考えたか」という二つの側面に注目し、上述の課題を検討した。また、検討時期としては清国からの独立とその抵抗が最も盛り上がった一八八四年一二月の甲申事変までとする。

本論文では、一九世紀後半における朝鮮をめぐる国際情勢に着目しながら、日本を利用しつつ日本をも乗り越える「力強い現代的国家」を目指し朝鮮近代を主導した金玉均と、「援助」というきわめて具体的な対朝鮮政策をもって「朝鮮の近代＝日本化」をはかった福沢の相互認識を明らかにしている。金玉均と福沢は、旧来の朝・清宗属関係の解体を目指した点においては一致した姿勢を見せているが、その意味するところは決して楽観的なものではなかった。

金玉均の朝鮮近代への模索は、前近代への「反発」と近代の「模倣」として表出され、彼は朝鮮の近代化を成し遂げる方法として日本型の近代化を模倣しようとし、甲申事変はまさにその試みであった。とはいえ、金玉均が朝鮮の近

代Ⅱ日本化と認識したわけではない。実に彼が目指したのは西洋文明による朝鮮の近代化であった。また日本型の近代化の模倣においても、単にそれを朝鮮社会に取り入れようとする姿勢だけではなく、日本への強い対抗意識が潜在していたのである。彼にとつて朝鮮は、日本を含めた「外国の侵略」を乗り越える方法として日本と同じく「脱亜文明富強化」の道を歩まねばならなかったのであり、これはまさしく「朝鮮大國化」という方向性を金玉均が模索したことに相違ない。

また、金玉均と福沢の「朝鮮改造論」は、朝鮮の近代化はもちろん、朝鮮を取り巻く東アジアの国際関係の再編をも同時に意味するものであり、宗属関係の廃棄という容易ならざる課題を背負っていた。金玉均の朝鮮改造論の方向設定において多くの影響を及ぼした福沢の目的は、華夷秩序から朝鮮を解放し、「朝鮮の改造Ⅱ日本化」、すなわち日本の朝鮮進出であつて、またこれは朝鮮の盟主となる政策として表出した。このような福沢の朝鮮改造論は日本の軍事的、経済的、政治的圧力をもとに進められたものではあつたが、その「援助」は対朝鮮文化政策として具体化された。しかし、朝鮮改造の試みであつた甲申事変が清国の軍隊によつて鎮圧され、日本が朝鮮の盟主たることは決定的に不可能になると同時に、福沢は「朝鮮の改造Ⅱ日本化」という主張を放棄するにいたつたのである。

坂野潤治が指摘しているように、福沢は朝鮮に対して、武力行使を背景として親日派政権を樹立しようと絶えずその機会を狙っていたと解釈することもでき、そのような意味では、朝鮮改造論を唱えていた時の方が、「脱亜論」以後よりも、はるかに侵略的であつた（『明治・思想の実像』創文社、一九七七年）。というのも、福沢は文明国である日本による「アジア盟主論」を主張しつつ、朝鮮への進出を正当化していたが、朝鮮側から見れば、日本の朝鮮進出は西洋諸国のアジア進出と大差なく、同じことであつたからである。また、福沢のアジア蔑視観や脱亜意識は一貫して存在し続けており、「脱亜論」を主張した時には、

すでに日本Ⅱ西洋文明という等式が成り立っていた。さらに、これは「脱亜論」以降にも決して消滅しうるものではなく、より具体的に時代状況に対応しうる政策として適用されたといえる。

一方、朝鮮改造論における金玉均の狙いは、日本を利用しつつ日本を乗り越える朝鮮近代化を目的とするものであつたが、またそれは福沢によつて「朝鮮の改造Ⅱ朝鮮進出」として利用された。これらは、金玉均と福沢両者にとつては自国が直面していた「近代」という時代的課題において選ばざるを得なかつた選択だったのであるが、しかしこのように彼らが歩んだ近代への同行は、結局のところ近代におけるその後の日韓関係のあり方を暗示しているといえよう。

平田篤胤における中国思想の受容

——道教思想を中心に——

史学専攻（日本史） 肖 琨

本論文は国学者平田篤胤の思想における中国道教思想の受容を取り上げ、篤胤の庶民層に積極的に目線を向ける姿勢を検討し、道教の発展後期のシンボルである善書の庶民性と篤胤の東アジアにおける広い視座との共通性を考察するものであり、キリスト教ではなく、道教こそが篤胤の古史策定作業に最適な受容対象として扱われたことを確認する試みである。

内容的に第一章は西洋先進科学知識の前に国学者の世界認識の変容と、『三大考』から『靈能真柱』への篤胤の新たな幽冥観の形成を大概に把握した。篤胤の異質な世界観を受容する姿勢を検討し、受容の対象として道教を選択する眼差しを分析してきた。第二章は肝心の道教思想を取り上げ、篤胤の神仙・仙境への非常な関心から着手し、中年以降篤胤の道教典籍への取り組みと「道」の再解釈を考察してきた。第三章はまず「死」というキーワードから篤胤の死生観と善悪観と善書の特徴を考察した上、死後の審判の問題に関して、『本教外篇』と『古史伝』に見られる従来のキリスト教の影響以外に、善書思想の受容という新しい課題を提出した。

ドルゴン政権の成立とその構造

——八旗制度からの考察を中心に——

史学専攻（東洋史） 磯 部 淳 史

本稿は、清朝順治初期のドルゴン政権の支配構造について、特に八旗制度の人的組織、および各官職の特徴の面から考察を行い、以下の二点を明らかにすることを目的とするものである。一つは、ドルゴン政権の史的展開を跡づけること。もう一つはドルゴン政権の性格より窺える、清初政治史におけるドルゴン政権の位置づけ、さらには清初の皇帝権のあり方を提示することである。

清朝の順治期（一六四四年～一六六一年）は、清が入関によって、その一大転機を迎えた時期である。しかし当時の皇帝であった世祖順治帝は幼少で、入関の指揮を執ったのは、順治帝の叔父である摂政のドルゴンであった。このドルゴン政権期は、清初において非常に重要な時期であったにも関わらず、該政権に関する専論は極めて少なく、不鮮明な部分が多い。筆者が本稿においてドルゴン政権について考察を加えるのは、このような問題関心によるものである。

清初における国家体制は、八旗制度を基調とした「連旗制」と通称される分権的連合体制であり、皇帝といえども両黄旗を領有する旗王の一人に過ぎなかったことは、先学によって度々指摘されている。こうした連合体制に対して、皇帝権力の強化を図ったのが太宗ホンタイジであり、太宗は一代を通じて皇帝Ⅱハン権強化政策を推進した。その後を襲ったのがドルゴン政権であり、ドルゴン政権とこの太宗朝の政策は深く関わっており、続く順治朝でも、この皇帝権の問題は引き継がれている。ドルゴン政権は、すなわち太宗朝と順治朝を繋ぐ時期であり、「連旗制」や清初の皇帝権力の問題とも密接に関連しているものと思われ、本稿

が特に八旗制度と関連づけてドルゴン政権を論じる理由もそこにある。またドルゴン政権期は、前述したように清朝の変革期に当たり、入関以後、清朝の制度がどう変化したのか、あるいはしなかったのかを論じる上でも、ドルゴン政権期の八旗制度の解明は、早急に求められるべき課題であるといえる。

本稿では、まず第一章においてはドルゴン政権期の政治抗争に焦点を当て、順治帝即位の段階では、清朝内部に母系や婚姻を核とする三つの勢力が存在しており、ドルゴン政権が不安定さを持っていたこと、また政争においてドルゴンに与した満洲旗人には、八旗内の特定の要職にあった人物が多いことを指摘する。続く第二章では、第一章で提示したドルゴン派旗人達に共通する八旗の官職であるグサエエエン（旗の指揮官）について考察を加え、グサエエエンが戦時の指揮官であることに加え、自旗内の行政全般を行う職であり、太宗やドルゴンが、このグサエエエンを利用して他旗へ影響力を及ぼそうと意図していたことを明らかにする。第三章では、第一章で指摘した政権の不安定性を解消すべくドルゴンが行った政策に着目し、ドルゴンは旗王としての立場から政権を構想していたということ、そしてドルゴン政権は太宗朝と順治朝を繋ぐものであり、清初の皇帝権力の問題として理解されるべきであるということを示す。

天曆の内乱とその影響

——元朝後半期の政治史の一考察——

一七四

史学専攻（東洋史） 浦山 郁美

十三世紀、モンゴル族によって建てられた王朝である元朝は他の中国王朝とはまた異なる性格を持っていたとされている。その一つに例えばモンゴル帝国草創期、早くからモンゴル族に降った者を優遇したとする根脚の制度に見られるように、王朝内における君主たる大カアンとその臣下間での人的な繋がりの重視というものがあると考えられる。筆者は今回、この修士論文でそうした人的関係の強さが伺える事例であり、また元朝研究においては北宋以来の中国統一王朝の出現ということもあり、その創立者であるクビライの時代についてはこれまでに多くの先行研究がなされているのに対して、資料上での制約もあって基本的な政治史の流れでさえもまだその本質が明らかにされていないとも言われる、元王朝後半期の政治史に対して考察も加えるという目的を持って二二八年七月、モンゴル帝国九代目の大カアンである泰定帝イェスンテムル没後の次の大カアンの位を巡って勃発した『天曆の内乱』について関連人物を中心にして論を展開した。『天曆の内乱』は元朝後半期に起こった大きな一大クーデターであり、泰定帝の子供を推す一派に対して、第六代目の大カアンであった武宗カイシャンの子供を次の大カアンとして推した燕鐵木兒（エルテムル）を中心とするグループが立ち上がり、最終的には勝利を収めることとなった。この内乱は元朝内の広い範囲で影響を与え、また多くの多数の元朝内における有力な人物や王族を巻き込んだものであった。今回この論文でそうした内乱に関わった人物を細かく追っていくことにより、燕鐵木兒本人もそうであるのだが、

勝利側となった燕鐵木兒一派には武宗カイシャンに直接ないし先祖が何らかの関わりを持っており、彼に重用されていた人物が多く味方しているという構造が浮かび上がってきた。とりわけ武宗カイシャンがまだ大カアン位につく以前に西北アルタイ地方の鎮庄に軍を率いて赴いていた時、共に従軍していた人物が多く見受けられることに人的な繋がりを考えることができる。また同じく武宗カイシャンの元に即位前よりあった色目人を中心とするキプチャク、アス、カンクリといった軍団が天暦の内乱でも多く燕鐵木兒側に見られることも一つの注目点として述べた。この論文で天暦の内乱を改めて人的要素から捉えなおすことで元朝後半期というものが繋がった一つの流れを持っているという構造を考えることができたように考えている。

戦国楚国制考

——地方制度と世族・封君を通して考える——

史学専攻（東洋史） 大澤 直人

これまで戦国史研究に関しては『史記』の秦についての記述に基づくイメージをもとにして戦国史は捉えられてきた。従来の戦国史は秦が統一国家となる過程として捉えようとするものであり、六国は秦との対比によって記述されてきた。そのため六国については秦との戦争や外交等の事件をのぞいて、国内の状況にかんする記述は極めて少ない。これまで戦国秦以外の諸国についての研究に関しては文献資料にみえる記述の少なさといった制約のために甚だ不十分な結果しか得られていない。これは戦国時代を通史的に扱っている資料が『史記』のみであり、『史記』の描く戦国期のイメージをもって戦国史を理解せざるを得ないという点によるものである。『史記』が戦国期を記述するために用いた材料が主に秦系資料に基づくために六国についても以上のようなイメージをもって語らざるをえないのである。しかしながら近年の開発に伴う出土物の発見によって戦国史を同時代的に把握することが可能となってきた。本稿では出土物によってこれまでに得られた見解を踏まえつつ、『史記』や『戦国策』等の記述を用いて特に戦国楚の国制の推移、国君権力と統治機構の関係から考察するものである。

まず第一章では、戦国楚の国制について恵王期にみられる“公”の存在に注目し戦国期の封君との関係について論じ、戦国期に出現する割拠的な封君の前身たる存在は既に春秋末にはみられており、楚の対外進出にあわせて辺境拠点に封君が配置され、次第に割拠的なものへと姿を変化させていったものであった

ことを示す。

続く第二章では、戦国世族の登場の背景と楚における戦国世族の役割について論じる。具体的には戦国世族である昭・景氏の系譜を追うことで世族の存在が長期的な政権の安定を確保する上で必要とされ、国君専権の過程で登場した過渡的な存在であったことを明らかにする。

そして第三章では、視点を変えて出土文字資料から懐王期の国制、特に訴訟制度よりみた地方制度のありかたについて論じ、訴訟案件の流れから戦国中期の楚における中央の地方に対する影響力が大きく、中央集権的な国制であったことを考察する。

最後に第四章では、春申君黄歇と国君専権の完成という観点より戦国後期の国制について論じ、後期の封君である春申君黄歇の政治的位置づけより楚において官僚制的統治機構に基づく国君専権の完成を示す。

以上の考察によって楚においても国君への権力の集中は一応認められるものであり、従来の「楚呉起を用いずして削亂し、秦商君を行ひて富彊す」(『韓非子』問田)とあるように秦が中央集権体制に成功した一方で楚は失敗したとする認識とは異なる戦国楚のイメージを提供するものである。戦国史研究はその資料的制約によって十分な研究成果は得られていないが、六国それぞれの戦国史を比較検討することで、戦国期を通時的に展望するための一つの視点が獲得されるところと考える。

唐前期における刺史の考察

一七六

史学専攻(東洋史) 坂爪 亮

本論文は唐の地方統治の中核をなす刺史に注目して唐王朝が地方統治に対し如何なる姿勢を持っていたのかを明らかにするものである。州刺史とは地方の民政を掌る地方行政機構の最高官であり、その人材選定には唐初から議論されていた。しかし実際その重要性は低く左遷官人が任用されていた。本研究では安史の乱以降、州が軍事化され刺史の重要性が大きく変化してしまつたため前期の刺史と後期の刺史とを区別しており、特に前期の刺史に焦点をあてている。

第一章では太宗の貞観年間から玄宗天寶年間までの上疏や詔勅から各時代における刺史の議論、そして唐王朝の刺史対策の内容を通観する。刺史の議論では朝廷の刺史人事への批判や本来の刺史の重要性を説いたものが多く、また刺史の人事選定の手段も論じられている。一方、唐王朝が刺史対策に乗り出すのは主に玄宗の開元年間からであった。唐王朝が取った手단은中央と地方の結びつきを強め、刺史の地位を上昇させるものであった。

第二章では刺史の職内容にふれ、また刺史の地位上昇が行われる背景について述べている。主に官吏の監視、民政の教化、文書処理といった刺史の職を踏まえ、また唐王朝が初めて刺史の人事選定に関する詔勅を下したのは睿宗の景雲年間であることから当時特に問題化されていた食封制の弊害・官吏考課の乱れといった社会的要因からも刺史人事の重要性が生じてきていることを示している。

第三章では開元・天寶年間における刺史就任者、地域別(刺史↓京官)就任率を挙げ、詔勅の実施情況について考察している。ここから睿宗の景雲年間・玄宗の開元年間に出された詔勅というのは首都周辺もしくは地方の大州等の重要

州という特定の地域の州刺史にのみ適応され、全国の州刺史に適応されたものではなかった事を示し、また刺史就任期間のほとんどが短期間であることから唐王朝は刺史を地方行政官というより昇進コースの一部として捉えている面が強いとみている。

春秋伝にみえる覇者観

——齊桓公を中心に——

史学専攻（東洋史） 重森 詩 円

春秋時代には、慢性化した諸侯間の紛争や国内問題を収めるため、「覇者」といわれる人々が現れた。彼らは強大な国力を背景に、衰退した周王室に代わって諸侯の統制に当たった。『孟子』は離婁下篇で、春秋時代の語源である魯の年代記『春秋』には、齊桓公・晋文公の事績が記載されていると述べている。

過去の覇者研究は『孟子』『左氏伝』『荀子』『呂子春秋』など、戦国時代の文献が中心であった。『春秋』には三つの注釈書が現存する。この中で、『左氏伝』は覇者研究の対象にされるが、『公羊伝』『穀梁伝』の覇者研究はあまりなされていない。『公羊伝』の覇者について日原利国氏は、天子や方伯が不在の無秩序な時代に、天下に新しい秩序を確立する新しい王者を示していると規定した。『穀梁伝』は『公羊伝』の影響下に成立したと思われる。しかし最終的に『公羊伝』とは異なる判断を下す場合が多い。このことから、『公羊伝』の覇者が新しい王者を示したものならば、『穀梁伝』の覇者とはどのような存在を示しているのだろうか。

第一章では、『穀梁伝』の成立とその思想をみていく。先述のように、『穀梁伝』は『公羊伝』の影響下に成立したと思われる。また『史記』や『漢書』において、『穀梁伝』の存在が明らかとなるのは、漢の宣帝の石渠閣論議の直前である。これらことから『穀梁伝』の完成は、武帝期から宣帝期の間と考えられる。次に『穀梁伝』の思想として、周王を頂点とした封建制度の維持があげられる。

第二章では、『穀梁伝』と『公羊伝』の覇者記述の比較を行う。『穀梁伝』では、誰を「覇者」とするかが明確にされていない。これに対して『公羊伝』には、「覇者」と認定される人物が存在する。そのため、まず『公羊伝』の覇者を確認し、その人物が『穀梁伝』ではどのように扱われているかを検討していく。

第三章では、齊桓公を通して『穀梁伝』の覇者観を述べる。戦国時代の文献にみえる桓公の主な覇業は、「尊王攘夷」と「存亡繼絶」である。しかし『穀梁伝』の桓公記述の特徴として「周室尊崇」があるが、「攘夷」や「存亡繼絶」については詳述されない。齊桓公の功としては、周室尊崇と諸侯間の和平が評価され、専封や兄を差し置いての即位が非難される。

『穀梁伝』における「覇者」は、周王の受命によって正式な「覇者」となる。また諸侯を封ずるなど、本来ならば王が行うべき事業を行った場合、それは越権と非難される。このことから『穀梁伝』において「覇者」は、周王の封建制度内での代行者として描かれている。

仏教の普及に関する一考察

——応報説話を中心に——

一七八

史学専攻(東洋史) 西尾 一 訓

仏教は元来インドの宗教であり、中国とは地理的にも文化的にも全く異なる土地で成立した宗教である。仏教の中国伝来はおよそ漢代ごろであるといわれており、史料的には少なくとも後漢の明帝期には中国における仏教信仰が確認される。このように中国における仏教伝来は比較的早期に行われている。しかし、仏教が歴史上有力な地位を確立するには、もう少し時代を下らなければならぬ。その原因は冒頭に述べた地理的・文化的差異によるものであり、特に文化的差異は伝来当初から大きな問題として仏教徒を悩ませた。中国は世界史上で見ても、特に古くから文化的に成熟しており民族宗教ともいふべき儒教や道教によって独自の精神文化を構築していた。伝統的な儒教道徳を身に付けた漢人にとって仏教は、所詮文化的程度の低い異民族の宗教であり許容できるものではなかった。仏教浸透の端緒となったのが、異民族政権が乱立した六朝代においてであるということも、このことを示唆している。

このような状況の中で仏教はどのように中国に浸透していったのであろうか。仏教の中国的改変や宣伝戦略の一環としての因果応報説話を中心に据え、民間普及の様相の一端を概観したい。

まず中国における因果応報説の歴史として、『後漢書』などに記される仏教の中国伝来当時の因果応報説へのインパクトや、『三報論』に見られる慧遠の応報論を見ていった。

慧遠は『三報論』の中で応報の顕現は“現報”、“生報”、“後報”の三種類であると記している。特に“現報”は、現世の行いが現世のうちに報となって現れるとい

う大変現世利己的性格の強いものであり、また、他の応報の形より明確で応報の存在を信じない人に対して、立証しやすいものであるので、仏教の宣伝戦略の一端を担ったと考えられる。

次に『太平廣記』報応類を中心史料として応報説話の分析を行った。応報説話の類型を分類すると、政治的災厄や自然災害などの様々な災厄に対する応報、復生説話や送子説話などに見える功德や禁忌抵触に関する悪報など、およそ民衆が遭遇するあらゆる状況における現世利益が用意されていたことに言及した。また最後に傍証として目連変文を取り上げ、民衆の受容を獲得するための要素として、因果応報と孝が重要な要素をなしたという考察を行った。

秦漢代貨幣史再考

史学専攻(東洋史) 平野 宏 一

秦の半兩錢を引き継いだ前漢代において、貨幣制度は度々変更されている。榆莢錢、八銖錢、五分錢、四銖錢、三銖錢、赤側錢、五銖錢と百年あまりの間にこれだけ多種多様の錢が発行されているのである。このような前漢代の貨幣制度混乱の象徴として盜鑄があげられる。何故なら盜鑄は文帝の放鑄政策を除き、武帝期まで頻繁に文献中に見られるからである。盜鑄とは不正に鑄造するという意味である。盜鑄などを含む不正に錢を鑄造する行為は、鉛や鉄を加え入れて造ることであり、それに類する行為はひそかに鑄の裏側をこすり合わせて銅紛を取る行為である。盜鑄及びそれに類する行為が生じる背景は、農事に関わるよりも不正に錢に鑄造した方がより利益が高いからであり、終息した理由は、錢を不正に鑄造しても採算が取れなくなったからである。採算が取れなくなった理由は、均輸・平準法による物価の安定によって、わざわざ盜鑄を行うこともなくなったからだと考えられる。また、前漢代の錢の改鑄理由として屢々見られる「輕重」という言葉の意味は、重量だと考えられているが、重量以外に貨幣価値という意味があり、貨幣価値の上下を決める要因として、錢の美悪、重量などを総合的に考慮した貨幣の質が考えられる。そういった総合的な質などに基づいて、商人が恣意的なレートなどによって取引する。従って、複数の錢文が入り乱れていたたり、同一の錢文でも大きく質に差があったりする場合には、価値が乱高下し易いのである。では最終的に上林五銖錢で落ち着いた理由は何であろうか。三銖錢以前は同一錢文でも、榆莢錢、八銖錢、五分錢、四銖錢と重量が大きく異なり、貨幣価値上下が錢の美悪、重量などを総合した貨幣の質に基づいているため、大いに混乱した。そこで、錢文の異なる

三銖銭を投入して、この混乱を終息させようとしたが、四銖銭よりも軽いため、盗鑄を誘発することになる。それ故、銭文が異なり、重量も重くした五銖銭を鑄造して混乱に終止符を打とうとしたが、五銖銭は当初郡国に鑄造させていたこともあって、中央の命令通りには鑄造されなかった。そこで、上林三官に五銖銭を鑄造させることにし、最終的に品質の良い五銖銭が出回ることになって、混乱が終息した。同一銭文でも、重量などの質が大きく異なる場合には、価値に差が生じ、複数の銭文が入り乱れている場合も同様である。それ故、異なる銭文を排除し、且つできるだけ同一品質の銭を流通させる必要があったのである。以上より漢代の貨幣制度の確立は、物価の安定による盗鑄の終息と上林五銖銭の優秀さによるものだと考えられる。

ポンペイにおける中小住宅の考察

——前2世紀以降の住宅形式をめぐって——

一八〇

史学専攻(西洋史) 木村 勇 気

一般的に、住宅を研究する事はその地域の社会的状況や背景を理解する事につながる。この事は古代にも当てはまり、現在ポンペイの住宅に関する多くの研究が行われている。しかし、これまでのポンペイの住宅研究は富裕層の住宅ばかりに注目してきたため、中小住宅やそれを取り巻く社会的背景を取り上げる事はほとんどなかった。しかし実際は、中小住宅はポンペイにおいて多数派を構成しており、統計から見れば中小住宅の方が一般的であり、都市の特徴や性格を決定付ける一因になっていたと考えられる。そうなると、富裕層の住宅形式だけに注目し、またそこから当時の社会を理解するのは困難かつ一方的であり、中小住宅に注目する事は非常に重要であると言え、本論において中小住宅の考察を行っていく。

本論における自身のスタンスとしては、これまでの富裕層の住宅を典型としてきた古典的な考えを批判し、さらにローマの住宅研究に新たな解釈を呈する事である。そのため、まず今まで考えられてきたポンペイ住宅の一般的・古典的な解釈を見ていき、それに対する批判を行っていく。また、住宅は社会を反映しているため、今までの古典的な住宅解釈に批判の目を向けるのであれば、その解釈と関連してきた社会的背景に対しても批判的なスタンスが自然と生じてくる。そのため、今まで住宅と結び付けられてきた社会的背景も再考していく。つまり、現在言われている富裕層の住宅とそれを中心とした社会的背景に対する考えから、中小住宅とそれを取り巻く社会的背景に視点をシフトする事

で、今まで注目されてこなかった住宅研究の新たな解釈を呈する事が出来ると考えている。

そして、中小住宅に注目する事は重要であるが、中小住宅は研究が少ないだけではなく、その定義そのものでさえ明白かつ統一されたものはなく、非常に曖昧である。そのため、本論の目的の一つとして、中小住宅を定義する事が出来る。そうする事で、富裕層の住宅と中小住宅との区別を明確にする事が出来る。中小住宅に注目した新しいローマの住宅の解釈が出来ると考えている。また中小住宅を定義付ける事で、ポンペイ都市内における中小住宅の分布状況を見る事が出来る。そして、この都市の多数派を構成していた中小住宅の分布状況をも見る事で、今までの富裕層の住宅ばかりに注目してきた都市研究とは異なった都市や社会の側面や性格を示せると考えている。

中世ヨーロッパの怪物人種

史学専攻(西洋史) 小谷 尚史

中世ヨーロッパには一本足の人間や耳が大きな人間といった人々に関する記述が多数存在している。こうした怪物人種に関する記述は『東方旅行記』だけではなく、マルコポーロの『東方見聞録』やオドリック・デ・ポルデノーネの『旅行記』など中世に書かれた様々な旅行記に存在する。怪物人種という存在は中世にとってメジャーであったといえる。

今回の修士論文で取り上げる研究対象はこの怪物人種である。私の主たる関心である怪物人種は中世の人々が信じる怪物におけるサブカテゴリーであり、異様な動物や人間の種族を示している。彼らは遠い異境に存在すると考えられており、この種の怪物としては犬頭人(キノケファロイ)、小人族(ピグミー)、一角獣やサルがあげられる。また、特徴として地理学的・博物学的伝統の中に存在し、単独ではなく種族として出現する。過去の研究の中では、旅行記に出てくる怪物人種を近代の人種イデオロギー・植民地イデオロギーのルーツとして、怪物人種を人間として捉える傾向がある。しかし、上記のように怪物人種は怪物として考えることが重要である。

私が扱う中世とは12世紀から15世紀の時代を指している。そして怪物人種は百科全書だけでなく、旅行記、世界地図、教会美術、写本の装飾といったあらゆるものに書かれ、描かれ始める。この怪物人種は、中世の人々にとってどのような役割を担っていたのであろうか。それがこの研究のテーマである。

今回の修士論文では研究史料として『東方旅行記』を使用した。『東方旅行記』とは15世紀までの中世における驚異譚の集大成であり、15世紀以降最もヨーロッパに広まった書物である。多種多様な怪物人種が記述されており、中世にお

ける怪物人種の認識が反映されていると考えられる。また『東方旅行記』は中世におけるマップマンデイの世界観をもとに書かれていると考えられている。そこで『東方旅行記』とマップマンデイを比較し、当時の世界観が同時代の旅行記に反映されていることを確認後、『東方旅行記』の記述を分析していく。『東方旅行記』の分析を通して、中世の世界観における怪物人種の存在の認識、形態の分類、様々な慣習について考察する。それらのなかで怪物人種はどのような役割を果たしているかを述べたい。

17、18世紀ヴェネツィア社会と

慈善院における女子音楽教育

人文総合科学インスティテュート 浅野 顕子

今も、その独特の美しい街並みにより観光都市として人気を集めているヴェネツィアは、かつて「アドリア海の女王」と称されるまでに繁栄した共和国であった。そこには、四つの大きな慈善院があった。それらはインクラービリ、デレリッティ、メンデイカンティ、そしてピエタの慈善院と呼ばれた。「慈善院」とは孤児を養育していた機関であり、ここでは女子に向けてのみ特別な音楽教育が行なわれていた。それが選ばれた女性の集団、「合唱の娘たち(Figlie di Coro)」であった。

ヴェネツィア共和国は18世紀末に訪れる崩壊へと向かってだんだんと衰退していくが、音楽活動は活気を保っていた。16世紀末から17世紀の初めにかけて始まった慈善院の音楽活動も18世紀に名声を極めることになった。四つの慈善院は競い合うようにして音楽のレベルを高めていった。そのなかでももっとも名声を世に広めたのは、アントーニオ・ヴィヴァルディも教師を務めたピエタ慈善院だった。ピエタを訪れた者は少女たちの音楽能力に驚き、ヨーロッパのなかでも最高の域に達していると褒め称えた。

日本では、こうした慈善院について特に焦点を当てた研究はなされてきていないと見る。このヴェネツィアの慈善院は一般の孤児院や修道院、そして音楽学校といったものとも違う、他に例を見ない独特の宗教的施設である。それはいったいどのような機関だったのか。そしてなぜ孤児の少女による音楽がそれほどまでに素晴らしいものとなることができたのか。また、慈善院の活動の裏にはどのような社会があったのか。それらを明らかにすることが本論の目的である。

第一章では、当時のヴェネツィア社会の特徴について考察し、その後、第二章においてサン・マルコ寺院やその他の教会、スクオーラ、アッカデミア、そしてオペラといった、ヴェネツィアにおいて練り広げられた多くの音楽活動について、どのようにそれらが慈善院と繋がっていくかを踏まえて考察する。そして第三章では、慈善院の「合唱の娘たち」や「マエストロ」などを含む教育体系や運営方法について、つまり慈善院の実態について明らかにし、最後に第四章において、少女たちの将来に関する考察から、慈善院が担った役割を探っていく。

慈善院の存在は、音楽が非常に重要であった当時のヴェネツィア社会のさまざまな特徴を表し、社会や音楽の世俗化が進む様相をも映し出す。なかでも私がかつとも惹かれたのは、「音楽による孤児の少女たちの自立」という、「慈善」という概念をも超える機能であった。ヴェネツィアの慈善院は、少女たちがブローの音楽家になることを禁じていたにしても、孤児や貧困者という社会から排除されかかった者たちに社会のなかで輝かしく生きる道を創り出した。そのために音楽が用いられたのだった。

このように、ヴェネツィアの慈善院の音楽活動は「音楽を用いての慈善活動」という新しい概念を私たちに教えてくれる。本論の考察が、「音楽」というものが社会に対して果たしうる役割について考える際の一つの手助けになればと思う。

シャーシャ文学に見られるマフィ

——『単純な話』をめぐる考察——

人文総合科学インスティテュート 吉村 法子

本論文の主題は、作家レオナルド・シャーシャが、シチリア内部の者としてマフィアをどう見ていたのかを探ることにある。彼はシチリア社会とマフィアの共生関係を描いた。この論文では『真昼のふくろう』（1961）と『単純な話』（1989）を比較し、作品分析を行う。『真昼のふくろう』は、イタリアでマフィアについて話すことさえタブーとされていた時代に、小説の題材に用いてイタリア中に衝撃を与え、結果、作家としての地位を築いた作品だ。それまでもマフィアに関する論文や小説などはあったが、小説で否定的な立場からマフィアを描いたのはシャーシャが始めてであった。シャーシャは、『真昼のふくろう』で始めてマフィアを書き、最後にマフィアを書いたのは28年後の『単純な話』である。この約30年間にマフィアは農村から都市へと進出し、その形態を大きく変えた。シャーシャのマフィアに対する見方も当然のことながら変化していて、小説でのマフィアの描き方に影響を及ぼしている。「一見単純だが、複雑な真実が隠されている」というシャーシャ作品の構造は、『単純な話』でより徹底的に行われている。実際の作品分析をするに当たって、次の二点の考察が欠かせない。ひとつは、シャーシャがイタリア文学の潮流において、どのように位置づけられるのかを探ることである。ヴェルガやピランデッロ、ブランカーティ、ジュゼッペ・トマージ・デイ・ランペドゥーサなどといったシチリア人作家たちの存在はシャーシャに大きな影響を与えている。彼らの精神は、間違いなくシャーシャにも受け継がれているのだ。シチリア文学は決して地方

文学ではなく、むしろ時代の先駆的な役割を果たしてきたことも特筆すべき点である。もうひとつは、シャーシャは「推理小説の手法を取った作家」と目されることが多いのだが、マフィアを題材とした小説を書くに当たって、なぜ探偵小説の手法を用いたのか、そしてその技法がどのような効果を生んでいるのか、について探ることである。それを解く鍵は、一九四〇年代から純文学の作家が、二流とみなされていた探偵小説の手法を、高度な芸術目的のために使い始めたことにある。純文学の作家によって解体された、探偵の理性が通用しない、ポストモダンの変化を遂げた探偵小説は、シャーシャが理性の通用しないシチリアを描くときに適していたのだ。

アイルランドのアーツ・アンド・クラフツ運動と

コテージ・インダストリー

——〈アイリッシュクロシェ・レース〉にみる「周縁」「女性」「手仕事」——

人文総合科学インスティテュート 奥田 よし子

アイルランドにおけるアーツ・アンド・クラフツ運動は、際立った特徴のないもの、ナショナルリズムの影響を受けた伝統産業の復興として語られ、これまでの研究では特に重要視されてこなかった。しかし、英国のような中心的指導者を持たなかったアイルランドにおいて、その運動は多くの女性たちの手仕事によって支えられていたのである。その手仕事とは、アイルランドの農家や家庭から生まれる「コテージ・インダストリー」である。特に19世紀に発見された「クロシェ・レース」には、アイルランドの「手仕事性」を語る上で欠くことのできない特徴を見ることが出来る。本論文は、このレースの考察を通して、アイルランドのアーツ・アンド・クラフツ運動の新たな側面に光を当てようとするものである。

第一章では、まず「クロシェ・レース」の持つ技法の特性を捉え、その美的価値について考察している。細い鉤針を使って編む、アイルランド特有のこのレースは、19世紀半ばから、アイルランド南部コーク州にあるウルスラ修道院の修道女によって、農村地域の飢饉を救う手段として始められた。この考察から、このレースがアイルランド独自に誕生したものでなく、海外の技法・モチーフの模倣、応用から成っていること、そして共同制作により、効率的な生産を可能にしていたことを明らかにした。

第二章では、そのレースに用意された展示の問題、特にシカゴ万博の展示空

間に目を向けている。世界初の万博、一八五一年ロンドン万博からアイルランドのレースは常に国際的な場で評価を受けてきたが、一八九三年のシカゴ万博においては、それまでの展示会とは比類ない規模で、展示・販売された。アイルランドのレースが展示された、会場中心部から外れた娯楽地区「ミッドウェイ」の二つのアイルランド村、そして中心パビリオンの一つである「女性館」を検討することで、その空間に提示されたアイルランドの「周縁性」、「女性性」への貢献を明らかにした。

第三章では、本来クローシェ・レースがその管理、教育のもとで制作されていた修道院、そしてその閉鎖的な環境を離れ、それが「コテージ・インダストリー」として農家、家庭の手仕事になり、アーツ・アンド・クラフツ運動へと影響を及ぼす過程を考察している。

アイルランドのクローシェ・レースは、修道院やコテージというアイルランドの前近代的な性格を背負い、家庭と労働が不可分な領域で制作される、まさにこの時代に求められた手仕事の理想を実現するものであった。そして、それは家庭の延長という形ではあったが、孤立した地域の女性たちの自立に貢献するものであったし、手先から生み出されるレースの持つ可能性も開放させた。アイルランドのコテージ・インダストリーには、アーツ・アンド・クラフツ運動の文脈では語られない、手仕事の美が残されているのである。

南京事件をめぐる論争の構造とその背景について

—— 論争の文脈的理解の試み ——

人文総合科学インスティテュート 大西 健 吾

本論文では、日本国内における南京事件をめぐる論争を扱っている。日中戦争初期の一九三七年十二月、南京を攻略した日本軍は大規模な残虐行為を犯し、多数の中国人が犠牲となったと伝えられる。これが南京事件（南京大虐殺）である。この南京事件に関しては、その実態をめぐる激しい論争があり、国内における論争は開始以来数十年が経過した現在においても激しい対立が続いている。様々な方面において研究が進展しているにも関わらず、否定派、虐殺派など各論説の間の対立は収まる気配を見せない。本論文の目的は、南京事件の論争における対立はどのようにして生じているのか、なぜ現在に至るまで解決に向かわないのかを探ることである。

客観的に論争を分析し、論争がどのような背景のもとに行われているのかを考察することは、南京事件とその論争を理解するうえで不可欠なものである。しかし現在南京事件に関して行われる研究は、あらかじめ事件に対する認識を固め、対立する論説を批判するためになされる場合も多く、論争を客観的に考察したものは少ない。また、論争の内容やその経緯を考察する場合も、肯定と否定のどちらかの立場に立ったものがほとんどである。客観的な立場から論争の背景や原因に迫ることは、論争の解決の可能性を探る上でも意義があることであるといえる。

本論文では、主に三つの点について論じている。第1章では、各研究者の南京事件に対する具体的な認識を比較検討する。論争を理解するためには、単に

激しい対立があるという認識にとどまらず、各論者の間で事実認識のどの部分が共有され、どの部分が共有されていないのかを整理することが必要である。

ここでは共有される事実認識に注目し、ある程度共有され得る「南京事件」像を描き出すことで、事実認識の相違が各論者の対立の根本的な原因ではないことを論じている。第2章では、事件をめぐる対立が生じる理由を探るため、虐殺派、否定派に分類される論者が持つ問題意識、双方の論説が唱えられるその背景を分析する。各派によって南京事件が論じられてきたその文脈を読み解くことで、事件をめぐる対立の背後にある、より根源的な対立を把握することを試みる。そして第3章では双方の論説が持つ問題点、限界点を考察し、対立を前提とした各派の論説の性質をより具体的に理解することを目指している。

これらを論じて通じて、南京事件の言説が日本国内独特の文脈の中に囚われているその様態を描き出し、なぜ論争が収束しないのか、国内における南京事件論争とは一体何であるのかについて、少しでも迫ることを試みたい。

満洲国の「回教徒問題」

人文総合科学インスティテュート 田島 大輔

一八六

東アジアの近現代史における重要な問題の一つとして、一九三三年に現在の中華人民共和国東北部に「成立」した満洲国の存在がある。日本においても満洲国に関しては、現在までに数多くの研究がなされているが、当地における多数のムスリム住民、及び彼らに対する日本・満洲国当局関係者による一連の文化・政治工作については、未だ十分な考察がなされているとはいえない。本論は、満洲国建国前夜からその崩壊までの時期を中心に、当地におけるムスリム住民に対する組織化の過程を明らかにすることを目標に、I章・II章において上記の問題の概略・先行研究について触れた上で、以下の様に考察を行った。

先ずIII章において、「日本進出以前の近現代満洲におけるムスリム社会」と題し、満洲（満洲国及び関東州に該当する地域。現在の東北三省）へのムスリム住民の定住化・コミュニティ形成の過程に関し、当地への人口流入・定住化は清朝初期の移民政策に促されてのものであったこと、当地に定着化したムスリムたちの中には社会的に高位に位置付けられるものも見られたが、彼らも民国成立時の社会変動の中で没落し、満洲国成立前には自己の権利等を保障する大規模な組織を構成出来なかったことを明らかにした。

次いでIV章においては、「日本進出後の満洲におけるムスリム組織化運動と関連組織の変遷」と題して、満洲国建国以前の事例として大連における「光社」の活動を、建国後の事例として満洲全土に支部・分会を置いた満洲伊斯蘭協会／満洲回教協会、ハルビンのモスクに拠点を置く回教協進会の成立・変遷を考察、それぞれの組織化に関わった日系官吏・日本人ムスリムの存在にも言及しつつ、事業・活動の特徴について論じた。特に満洲国建国後の組織化につい

ては、ムスリム側からの積極的参加も伺える当初の事例と、日中戦争開始後の再組織化以降の業務・活動内容の変質を論じること、組織化運動が時局の変動に伴い当局側の意向を強く反映するようになったことを明らかにした。

そしてV章においては、前章にて論及された組織事業の変遷に伴って生じた「回教徒反共運動」と「回教徒墓地移転問題」というムスリムをめぐる二つの「問題」を取り上げ、前者においては当時の日本本国における大陸のムスリムに対する興味・関心の在り方が強く反映されていること、後者においては満洲におけるムスリム組織化運動の契機となったと見做し得る幾つかの要素が見られることを明らかにした。

上記三章の考察を受け、最終章においては、満洲国における日本人の関与したムスリム住民の組織化は、当初ムスリム住民側からも積極的な動きが見られたものの、時局の変化によって統制・動員組織としての性格を色濃くしていたが、その様なムスリム住民側の自立性↓他律性への移行を伺える具体的な事例として、当地における二つの「回教徒問題」は、「満洲国のムスリム住民の存在」を考える上でも重要であると結論付けた。

戴季陶『日本論』再考

——「信仰」と「美の観念」を中心に——

人文総合科学インスティテュート 于 坤

現在の中日関係は、「政凍経暖文熱」と言われており、中国は近年、日本の文化や社会に注目しつつある。こうした中国人による日本文化への関心は、今に始まったわけではなく、凡そ一世紀も前に遡ることができる。列強の蹂躪を受ける清朝末期の大陸において、いち早く近代化を成し遂げた隣国日本への留学ブームが、その魁であった。一九〇五年、この本流に乗り日本へと船出した一人の少年がいた、後、孫文とともに中国革命の一翼を担った戴季陶、その人である。彼は、十四歳の若さで日本に四年間留学し、革命活動中の一九二七年『日本論』を著した。本論文は、この戴季陶に注目し、これまで捨象されてきた戴の少年時代、留学時代の経歴を射程に入れ、さらにその時局性だけが繰り返し論じられる『日本論』の中の、従来等閑視されてきた当時の日本人の精神面に焦点を絞って分析を重ねる。こうした点を以ってして、戴が当時の中国人・中国社会に何を求めたかったのかについて検討していきたい。なお本論文の構成は、序章（問題提起）、第1章～第3章、終章となっている。

はじめに第1章において、『日本論』の基礎的な研究を行い、当時の戴と日本との関係を考察し、『日本論』上梓までの歴史的な背景を明確にした。ここでは、彼の日本理解の形成を、少年時代の胎動期、日本留学時代の形成期、更に留学から帰国後の成熟期の三段階に分け論じた。次に、第2章において、『日本論』の位置付けを行った。『日本論』執筆当時、中国は国内外の勢力により混乱した状況に陥っていた。こうした亡国の危機に面した際、当時活動家・文筆家であ

った戴季陶は、これからの行くべき道を同胞に見せるべく『日本論』を出版する。それゆえ、この『日本論』は、同じく日本を題材にした黄遵宪の『日本国志』や周作人の『日本管窺』と異なり、日本の分析のみならず、中国の発展のためにすべきことを読者に提示していたのであった。続いて第3章は、『日本論』における日本人の「信仰」と「美の観念」に注目し考察を行なった。戴季陶は、『日本論』のなかで、日本民族が有する内在的な動力として「信仰」と「美」を挙げ、この二つの有機的な調和こそが日本の近代化の原因である、と高く評価している。強い「信仰」心と「美」を好む性格を兼ね備える社会こそが、理想的な国民国家である、とおそらく戴は考えていた。こうして戴は、元来着目されていた軍事や政治・産業体制のみならず、精神的な側面からもアプローチを試み、日本論を展開したのである。さらに『日本論』の意義の一つとして、中国の若い世代に期待を寄せ、早く目覚めようと呼び起こそうとした点も見のがせない。以上をまとめると、ハード面のみからの脱却を果たし、精神的恒常観や犠牲精神、また美的情緒を視座に入れ、この日本の内的特質を描き出すことにより、逆説的に当時の中国社会へ異議申し立てを行なった点、これこそが本書の根幹なのである。

しかしながら、戴季陶は『日本論』の終章において、日本社会のマイナス的な変化に言及しており、さらに本書の日本語訳がわずか半年後に出版されたことを考慮すると、中国のみならず当時の日本に対しても、滅びの憂を訴えたかっつたと言える。こうした日本を学ぼうと提唱する戴季陶は、日本も以前と比べネガティブな変化を蒙ってきている、と考えていたのである。ゆえに、本書は、中国社会ならびに日本社会への異議申し立て、といったふたつのベクトルを有していたのである。

A Lexical Semantic Approach to the Locative Alternation

英米文学専攻 工藤和也

This thesis explores an alternative approach in terms of lexical semantics that proves more successful in explaining the semantic and syntactic properties of the locative alternation between the theme construction, as in *John sprayed paint on the wall*, and the locative construction, as in *John sprayed the wall with paint*. Contrary to previous researches which assume twofold lexical conceptual structures for the locative alternation verbs, such as Rappaport and Levin (1988), who derive via “lexical subordination” a secondary conceptual structure of the locative alternation verbs, or Jackendoff (1990), who assigns an independent conceptual structure to each predicate in the alternation according to its distinct semantic features, I propose that any locative alternation verb only lexicalizes one base lexical conceptual structure as its core meaning and the locative alternation is triggered by the speaker’s subjective way of actual locative event construal.

The necessary properties of the locative alternation verbs are to lexicalize as their lexical items three conceptually separate subevents, namely <an action by agent>, <a change of location in theme> and <a change of state in locative>, which are causally interrelated to denote a locative event. The locative alternation can be considered as an instance of “gestalt shift” (i.e. a shift of cognitively foregrounded/backgrounded parts of event structure) of cognitive focus conceptualized in the speaker’s mind. In fact, of the two possible results of the action <a change of location in theme> is focused in the theme constructions, whereas <a change of state in locative> is focused in the locative constructions. The cognitive focus affects the meaning and form of a construction at the same time. In the realm of semantics, the cognitive focus contributes to dominance of interpretation, which often produces “holistic effect” on the locative argument in the locative construction. In the realm of syntax, on the other hand, the cognitive focus prescribes relative salience of event participants which then maps into the grammatical relation of the construction. In short, other than agent as the subject, the more salient participant between theme and locative must be realized as the direct object of the verb, along with particular semantic importance (e.g. affectedness), while the other less salient participant may be realized as the oblique object.

In this manner, language is viewed as a symbolic unit between meaning and form, and lexicon is acquired in our grammatical knowledge as a fundamental element to support this interrelationship. The approach presented in this thesis gives us an explanatorily adequate solution to the joint association between meaning and form of a language, without introducing an overly complicated lexical representation of verbs, and has good prospects to apply to many different construction alternations in many different languages.

William Blake's Angry Voice in Songs of Innocence and of Experience

英米文学専攻 山 崎 あゆみ

This thesis explores William Blake's criticism based on his anger as expressed in Songs of Innocence and of Experience (1794). Especially, we focus on fourteen poems from the Songs, and occasionally mention several other poems by Blake.

In the first chapter, Blake's criticism of the oppressive stratification of eighteenth-century Britain is discussed. The major poems examined are such as "The Chimney Sweeper" and "Holy Thursday" from both Innocence and Experience, and "London" from Experience. While the author shows us sickened London and its citizens, he also presents possibilities to overcome this sorrowful world. It is because that Blake believed that his country was shaped by both disillusionment and hope.

In the second chapter, Blake's attacks against religious hypocrisy are examined. The targeted texts are "The Divine Image," "The Human Abstract," "The Garden of Love" and "A Little Boy Lost." From a close reading of those poems, we learn that natural desires and honest enquirers are destroyed by religious hypocrisies. Yet Blake also instructs us that divinity is always beside and inside us. That is to say, Blake tells us that our sanctity is decided by ourselves.

In the last chapter, Blake's philosophy and critique of conventional education are studied. The chosen poems are "The School Boy" "Infant Sorrow" and the set of "Nurse's Song." Those poems reveal that adults can ruin children by enforcing oppressive education, yet they can simultaneously protect children.

As conclusion, the Songs is a mirror of Blake's philosophy of society, religion, education and, as the subtitle articulates, "the Two Contrary States of the Human Soul."